

弘前大学大学院地域社会研究科

令和2年度公開セミナー in 三沢市

## 「地域と何を、どう共創するのか：知識と人材」

弘前大学人文社会科学部 杉山 祐子

### 1. はじめに：人材育成？ ともにつくる・ともに育つ

#### (1) 本発表のねらい

「人材育成」が本発表に与えられたテーマ。だが、ここではAからBへの働きかけによってBの能力を高めるといような一方向的な「育成」ではなく、現場でのアクションに相互に関わることで通じて、関係者がともにまなび、ともに育つという事例を紹介する。そこから「地域」のとらえかたや、研究者を含む外部者のかかわりかた、さらに異質な人びとがともにあるアクションに関わることの可能性と方法論についてかんがえる

#### (2) 「開発」は地域の人びとをどう位置づけてきたか

① アフリカ開発政策の失敗から「内発的発展」へ

② 農村開発では在来知への注目： 草の根にまなぶとはいうものの、その方法論は？

→以下、アフリカ農村と日本での取り組み諸事例から検討してみよう

### 2. アフリカ農村にまなぶ

#### (1) 日常生活から発想する「村の宝」：タンザニア中央部ドドマ州農村

不安定な降雨で食料不足が頻発する地域

タンザニア国内でも貧しいとされる人々

MDGsの実現にむけたワークショップ（ドドマ大学との共同）

村の宝さがしワークショップ

楽しみとしてのワークショップ

→相互に語り合う素地はできるが、

WSだけでは内発的な新しい動きを生み出すのは難しい

機動力を生み出すのは何か？

(2) ともに調査し試行する：ザンビアの焼畑農法を「科学」し「改良実験」する

1980年代からの生態人類学的調査

少年たちとのやりとりから10年—青年になった彼らからの「挑戦」

在来農法を軸に実験畑をつくる

—タカムラ・チテメネの衝撃と草の根技術革新の歴史

—100年以上にわたる村びとの試行錯誤

—新しい技術が底上げ的に普及するしくみ

この活動にかかわった地元の人びと—土地収用にあっても農を手放さず新しい生活を模索する人になる→次世代の主体的な動きにつながる

(3) タンザニア SUA (ソコイネ農業大学) メソッド：開発実践にむけて現地の研究者・日本の研究者・村びとがともに調査・ともに構想・試行する手法をつくる

1980年代から在来農法をめぐる生態人類学的調査、地域研究の蓄積

JICA プロジェクト技術協力

タンザニア、モロゴロにある SUA (ソコイネ農業大学) との共同で、

急傾斜地で発達した在来農法を生かし、地域の人々の内発的・潜在的な力を引き出す開発協力の手法を模索

SUA の研究者・学生と日本の研究者が対象地域へ

たとえば、ハイドロミルの建設時に地元の人びとが想起した「セング」を

ハイドロミル維持管理のための組織づくりに生かす (荒木 2011)

背景となった理論的枠組み (掛谷 2011)

① 川喜田二郎のアクションリサーチ論 W 型の問題解決図式

2つのレベルの往還を想定 思考レベル⇔経験レベル

構想計画立案前に思考レベルでの問題提起を基点としつつ、野外調査を必須とする→データをして語らしめる (先入観できめつけない)

これをふまえて構想計画、手順化→実施→結果を吟味→フィードバック

② SUA メソッドの構築 NOW 型モデル

川喜田の図式をモデルに、実態把握、アクションリサーチ、実践の3段階を設

定、フィールド調査をベースにした「焦点特性」の抽出、それに基づいた解決策立案、実践、結果の検証、フィードバック

この過程に地域の多様な人びと、研究者、学生、行政関係者などが関わり、相互交渉のなかから課題や潜在力の発見、解決にむけた方向性を共創

### 3. 日本での取り組みからまなぶ

(1) あるもの探し 「梅栗植えて・・・」地域の潜在力、内発的な動き  
北上プロジェクト、月山（大川 2006 ほか）

T型集落点検

(2) 集落再生事業（集落点検）・三沢市根井にまなぶ

青森県・三沢市・根井集落・弘前大学（教員、学生）（2014年度～2016年度）

人口減少予測は厳しいが、「集落力」の高い根井集落

→高い集落力はどのように形成されたか、維持・再生産しうるか

表1 2014年度～2015年度活動内容（青森県および三沢市主催イベント含む）

年月	活動内容
2014年8月	ごあいさつと活動計画打ち合わせ、調査依頼 集落点検（調査項目に基づく聞き取り調査、43世帯が協力）
10月	根井集落クリーン作戦参与観察・グループインタビュー 先進地視察（山形県由利本荘） クリーン作戦参加&ミニグループセッションまとめ報告会（内部）
11月	集落点検中間報告ワークショップ（『おいしいものを食べて、根井のこれからを考えよう』）
12月	中間報告WSの結果を受けて、弘前大学から三沢市担当者へ今後の活動案 旧根井小学校イルミネーション飾りつけ
2015年1月	根井町会総会
2月	今後の方針等について三沢市役所で打ち合わせ
3月	弘前にて、集落点検報告会 「旧根井小学校で大学生と遊ぼう」イベント(3/28-29) 「ねいひろ通信vol.1」
5月	「ご縁日」参加 「ねいひろ通信vol.2」
8月	イベント「根井の看板作ろう！」 先進地視察(秋田県羽後町)
9月	イベント「旧根井小で大学生と遊ぼう」第2回 「ねいひろ通信vol.3」
10月	根井集落クリーン作戦+収穫祭
12月	集会所・旧根井小学校イルミネーション 「ねいひろ通信vol.4」
2016年2～3月	イベント「旧根井小で大学生と遊ぼう」第3回
3月予定	報告会

		地域の中のまなざし	
		認識している	認識していない
外部からのまなざし	認識している	<p>事前の資料収集・事前打ち合わせによって共有 構造化インタビューでも</p> <p>例)人口減少、道路の危険性など</p>	<p>半構造化インタビュー・参与観察・他地域事例との比較によって発見</p> <p>例)クリーン作戦へ高い出席率 二世帯同敷地居住 三沢市街との距離</p>
	認識していない	<p>半構造化インタビューによって発見(8月調査)</p> <p>例)サイバタケ(自給用農業) 湧水、「昔の料理」など</p>	<p>ワークショップ(中間報告会)での協働作業によって発見</p> <p>例)今の子供たちが旧根井小学校を利用、安全な遊び場がほしい、世代間交流の必要性</p>

図3 異なるまなざしの交差による課題と可能性の発見

このプロジェクトのあと、学生たちが地域で活動するサークルを立ち上げた＝学生たちが根井の方々に育てていただいていた(！)

#### 4. おわりに：ともにつくる・ともに育つ

- (1) ともにつくり、ともに育つ、実のある活動には時間がかかる
- (2) 外部者が介在すると、「通路」ができる
- (3) 若い世代と共にする調査が有効
- (4) 異なる世代の意見が忌憚なくやりとりできるフラットな場
- (5) フィードバック・フィードフォワード
- (6) 主体的なアクターになる：される調査からする調査へ、させられる試行からする試行へ
- (7) ともにつくるインタラクティブな過程にこそ「知識の貯蔵庫」ができる

#### 引用文献

- 荒木美奈子 2011 「「ゆるやかな共」の創出と内発的發展」 掛谷誠・伊谷樹一(編)『アフリカ農村開発と地域研究』京都大学学術出版会
- 大川健嗣 2006 『さがすこだわる地域づくり論』河北新報出版センター
- 川喜田二郎 1993 『創造と伝統』祥伝社
- 掛谷 誠 2011 「アフリカの発展とアフリカ型農村開発への視点とアプローチ」 掛谷誠・伊谷樹一(編)『アフリカ農村開発と地域研究』京都大学学術出版会